研究紀要　第9号　31－38頁　2001年3月
㈶とちぎ生涯学習文化財団　埋蔵文化財センター

〔研究ノート〕

袋状土坑における覆土形成過程の復元
―土器出土状況の分析を中心として―

合田（ごうだ）　恵美子（えみこ）

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　検討対象とする袋状土坑の概要
Ⅲ　袋状土坑における遺物出土状況
Ⅳ　袋状土坑の覆土形成過程の復元

本稿では、袋状土坑における覆土形成過程の復元を目的として、特に遺物出土状況と覆土の堆積状況の詳細な記録化を行い、事例検討を行った。その結果、一見類似する出土状況と思われた袋状土坑が、それぞれ異なる覆土形成過程を経て埋没していく状況が確認できた。

Ⅰ　はじめに

栃木県内では、袋状土坑における覆土形成過程とその要因に関する研究が、この遺構の調査事例が増加し始めた1970年代から多くの研究者によって行われてきた（塙・田代1970、長島・田代1971、塙・中村・橋本1974、海老原1975など）。特に、海老原郁雄氏による梨木平遺跡の第4次発掘調査報告では、袋状土坑内の覆土堆積状況と遺物の出土位置の三次元的な位置関係の綿密な観察と記述を元として、袋状土坑が廃絶されてから埋没するまでの過程を復元しパターン化することが試みられた（海老原1975）。近年では塚本師也氏が、品川台遺跡の調査における遺物出土位置の全点記録と接合作業を元に、袋状土坑の埋没過程や土坑間の時間的関係の復元に取り組んでいる（塚本1992・1998）。

筆者は、平成10年度に袋状土坑が多く発見されている益子町御霊前遺跡を調査する機会に恵まれ、袋状土坑の覆土形成過程を復元するためのデータ作りを目的として、特に遺物出土状況を詳細に記録することを試みた。しかし、時間的制約や筆者の技量不足などから、報告書にその成果をまとめることができなかった。そこで本稿では、御霊前遺跡で比較的残存状況が良かったSK-153、SK-156の記録のうち、主に遺物出土状況に関する部分を再整理することによって、袋状土坑における覆土形成過程の一端を復元することを試みる。

Ⅱ　検討対象とする袋状土坑の概要

御霊前遺跡（芳賀郡益子町大沢）は、小貝川支流である大羽川右岸の南西に面した広い舌状台地上に位置しており、縄文中期中葉から後葉にかけての袋状土坑が約180基発見されている。（進藤・合田・後藤2000）。また、県道拡幅部分の調査（平成10・11年度）により、舌状台地の南端部分からも同時期の袋状土坑が多く発見されており、土坑群が台地先端にまで広がっていることが確認されている（永岡・後藤2000）。本稿において検討の対象とするSK-153、SK-156は、この袋状土坑群の中に位置する遺構である。ここで、報告書に記述した事実記載を補足しながら、その概要をまとめておく。

a. SK-153

SK-153は舌状台地のほぼ中心に位置し、袋状土坑SK-152を切っている。開口部の削平以外には大きな撹乱を受けておらず、残存状況は比較的良好であった。直径約３ｍの円形を呈し、開口部から底部に向かって大きくオーバーハングする形状である。深さは約90cmで、底面は鹿沼軽石層を約30cm掘り込んでいる。付帯施設として、底面に５基のピットが確認された。覆土は逆レンズ状に堆積しており６層に分層されたが、色調や内容物の違いから大きく上層（１・２層）、中層（３層）、下層（４・５層）にまとめることができる。このうち、下層とした土層は、御霊前遺跡において多くの袋状土坑で確認されている特徴的な土層だが、SK-153では特に厚く堆積していた。

遺物は、１・２層中と５層下部からまとまって出土している。１、２層中の遺物集中は大型の土器片を中心としており、開口部から約10cmほど掘り下げた段階で確認された。さらに掘り下げていったところ、その集中部は、２層中まで続いていた。また、底面周縁に部分的に大形の土器破片や礫がまとまっていた。

b. SK-156

SK-156は、SK-153同様舌状台地のほぼ中心に位置する。他遺構との切り合いはなく、開口部が削平されているほかには、大きな撹乱は受けていない。直径約３ｍの円形を呈し、開口部から底部に向かって大きくオーバーハングする。深さは約80cmで、底面は鹿沼軽石層を約30cm掘り込んでいる。付帯施設として、底面北側隅にピットが1基確認された。覆土は逆レンズ状に堆積しており７層に分層されたが、大きく上層（１層）、中層（２・３層）、下層（４・５層）、最下層（６層）の４層にまとめることができる。この土坑では、下層は明瞭なロームブロック主体の土層であり、SK-153で確認されたような明るい褐色の土層は底面を薄く覆っているに過ぎない。

SK-156は平成10年度に調査された袋状土坑の中で、最も多くの半完形土器が出土した遺構である。半完形土器の多くが５層上面からまとまって出土し、特に、底面周縁からまとまってい

ることが確認された。また、底面北西隅と北東隅の３カ所からは未焼成の粘土塊が出土している。

Ⅲ　袋状土坑における遺物出土状況

各土坑の出土状況を検討する前に、本稿で作成した各図の特徴と目的について以下に説明する。

①　遺物出土状況微細図　　御霊前遺跡の本報告書に掲載した遺物出土状態微細図（以下微細図とよぶ）に、遺物出土位置の情報を付加した。報告書では、遺物の出土レベル表や遺物出土状態のエレベーション図を作成することができなかったので、微細図を見ただけでは、遺物が水平に広がって出土しているのか、レベル差を持って出土しているのか、という出土位置の情報がわからない。よって本稿では、土坑底面より出土した遺物をトーンによって示すことによって、他の遺物との差別化を図った。

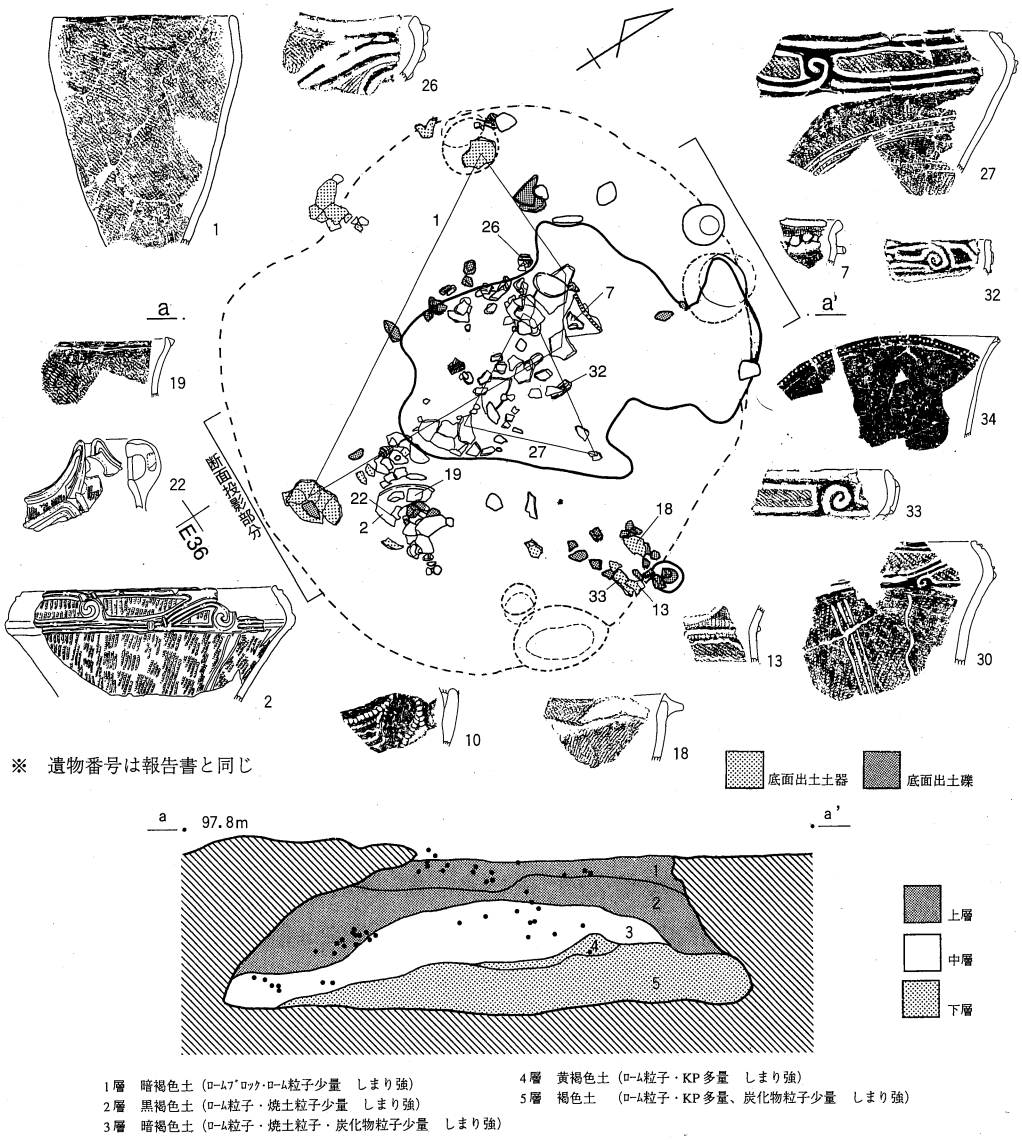
②　覆土堆積状況断面図・遺物出土状況断面投影図　　本報告では覆土堆積状況断面図（以下覆土断面図とよぶ）のみを掲載したが、本稿では調査時に分層した土層をその特徴によって上層・中層・下層に統合し[1]、さらに出土遺物の出土レベルをドットで図示する遺物出土状況断面投影図（以下断面投影図とよぶ）を作成した。この図は、①で示した遺物の垂直分布を、覆土断面図と対比させることによって、その出土層位をとらえることを目的としている。

③　覆土堆積状況平面図　　御霊前遺跡の調査時に、SK-156については平面的な覆土堆積状況を試験的に記録した。これは、遺物の出土状況と覆土の平面的な堆積状況との間に、何らかの関係性を認めることが出来るのかを確認するために行ったものである。具体的には、覆土下層が堆積している範囲を、コンター図や平面図として記録化した。本稿では、微細図の中に下層堆積範囲を破線で示した。

これらの図は、袋状土坑の発掘調査において日常的に記録されていながら、報告書には掲載されることの少ないデータを元にしたものであり、何ら特別なものではない。これらの図を用いながら、本稿でそれぞれの覆土形成過程を復元するための情報となる各土坑における土器出土状況を以下にまとめる。

・SK-153（第１図）

SK-153の調査時の所見では、開口部から10cmほど掘り下げた時点で土器の集中部が確認されている。投影図では、覆土上層から中層にかけてドットが集中している部分にあたっており、ほぼ調査時の所見通りの結果が得られた。しかし、調査時には遺物の出土は上層の１・２層中で完結するものととらえていたが、投影図では中層にも認められた。つまり、上層と中層でそれぞれ遺物集中部分があったと考えられるが、それは調査所見のような面的に広がるものではな



第１図　SK-153土器出土状況図（遺構図Ｓ＝1/40）

い。

底面周縁の土器集中は、調査所見通り底面周縁の南から南西部にかけて認められる。しかし、報告書中ではその出土層位が下層下面であるととらえていたが、断面投影図を見ると実際の出土層位は中層であり、下層中からはほとんど出土していなかった。このことから、下層が厚く堆積する遺構北側から北西側にかけては、底面周縁に土器が遺存していないことも納得のできる出土状況であるといえよう。

出土土器は、報告書の時期設定で第Ⅱ期（阿玉台式終末期）から第Ⅴ期（加曽利ＥⅡ式期）

にわたっている。最も多く出土している第Ⅴ期の破片はその多くが上層に集中していたが、一部底面周縁からも数点出土している（第１図33など）。第Ⅱ期・第Ⅲ期の破片は、底面周縁や中層から出土しているものが多いが、上層の第Ⅳ・Ⅴ期の破片集中の中にも数点混ざっており、時期毎に出土層位がはっきりと分かれる状況は確認できなかった。また、底面周縁から出土した大型の破片は、土坑中央の中層から出土している破片と接合し、ほぼ完形となった（第１図１）。一方で礫は底面中央よりの下層中からも出土しており、土器の出土状況とは異なった状況が観察される。

・SK-156（第２図）

SK-156の調査時の所見では、多くの半完形土器が５層（下層）上面から面的に出土していると考えられたが、投影図では、その他にも５層の上位となる中層全体に土器が含まれている様子が確認できる。また、所見通り土坑東側に、明確な集中部が確認される。これらの土器はほぼ中層内でまとまっており、上層中からは殆ど出土していない。SK-153において、上層から中層にかけて土器が散布していたのとは対照的である。

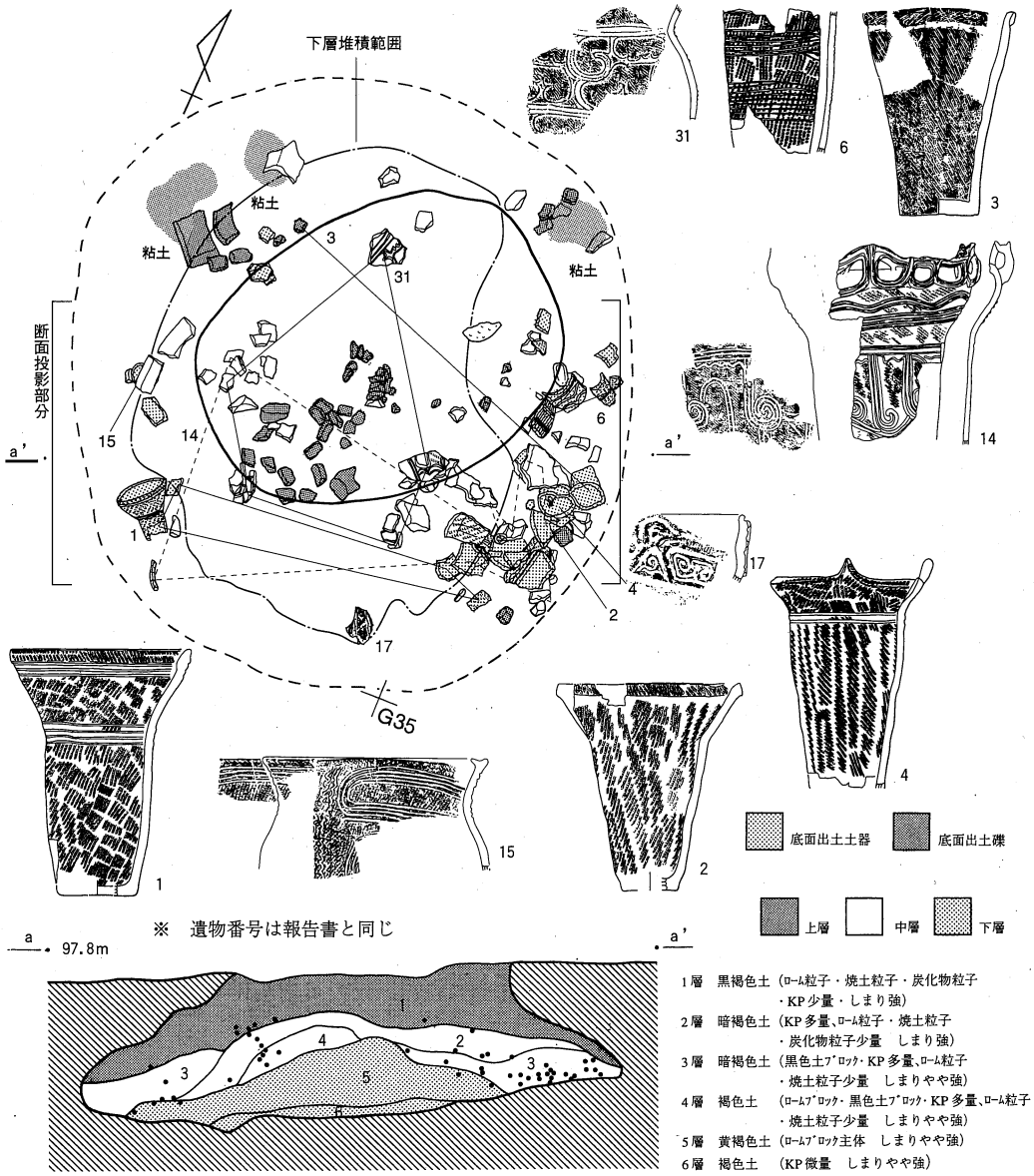
SK-156の底面周縁に認められた土器集中は投影図でもはっきりと確認されるが、その出土位置も、下層の堆積していない部分にあたっている。さらに、第２図の下層堆積範囲と、トーンで示した底面出土土器の出土位置もほとんど重ならないことからも、調査時の所見が裏付けられよう。また、底面出土土器の多くが接合し半完形個体となった。平面的な位置が離れた破片同士で接合した事例もあるが（第２図１・３）、SK-153のように離れた層位間で接合するものはなかった。また、これらの出土土器は第Ⅱ期に比定されるものがほとんどであった。一方、礫は底面中央の下層中から多く出土しており、土器とは対照的に底面周縁からの出土は少ない。

ここまでの分析結果を以下にまとめる。

1.　SK-153・156の両土坑における底面周縁の土器集中は、底面から出土しているものの、その出土層位は下層ではなく、それよりも上位の中層である。SK-153における第１図１や、SK-156における第２図３・14などのように、底面周縁から出土した破片と、中層中から出土した破片が接合する事例も認められた。よって、両土坑から出土した底面周縁の土器は、その多くが下層が形成された後に土坑内に廃棄されたものと考えられる[2]。

2.　SK-156では、出土資料の多くが接合し半完形個体となり、細別時期ではほぼ1時期にまとまる。よって、SK-156では土器廃棄のターゲットとなる期間が比較的短期間であったと考えられる。また、出土土器は半完形土器が多く、出土層位も中層にまとまっているが、特に下層直上に集中している。さらに、土坑東側の土器集中と、土坑西側の土器の間に接合関係が認められることから、SK-156では出土土器が元々一括して廃棄された可能性が高い。

3.　SK-153では、出土土器が細別時期で５時期にわたる。これは、土器廃棄のターゲットとな

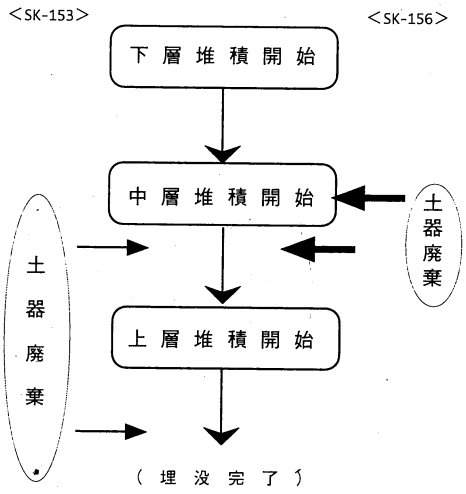


第２図　SK-156遺物出土状況図（遺構図Ｓ＝1/40）

る期間が長期間にわたる場合と、土坑外にすでに廃棄されていた破片を集めて投げ入れるといった二次廃棄の対象となった場合との２通りが考えられる。しかし、第Ⅱ・Ⅲ期に比定される出土土器の多くが破片で、出土層位も中層から上層にわたっており、部分的に集中するといった状況は認められないことから、これらの破片は、すでに廃棄されていたものが集められ、土坑内に二次的に廃棄されたものと考えられる。よって、SK-153が廃棄のターゲットとなったのは第Ⅳ期から第Ⅴ期の２時期にわたっていると考えられるが、これらの破片もSK-156に見ら

れるような集中部は形成されていないことから、少量ずつの廃棄が数回行われた結果と考えられよう。

4.　両土坑とも礫は土器の出土状況とは異なり、底面中央の下層中からも出土している。これが礫が土器とは異なるタイミング（下層の形成以前）で土坑内に廃棄された結果であるのか、或いは土器に比べて礫が重いために、土坑底面まで沈んでしまった結果であるのかは、今回の検討材料のみでは判断できないが、SK-156に顕著に見られるように、礫と土器の出土位置がはっきりと分かれる状況からは、両者の廃棄のタイミングが異なっていた可能性が高いと言える。



第３図　覆土形成過程模式図

Ⅳ　袋状土坑における覆土形成過程の復元

御霊前遺跡SK-153・SK-156の遺物出土状況についてまとめたが、本稿での分析結果に基づいて、両土坑の覆土形成と土器廃棄のタイミングを復元してみたい。

SK-153ではまず下層が形成される。その後中層が形成され始めると共に土器片が廃棄されはじめるが、第1図1の破片がまとまって廃棄される他は、ほとんどが土器破片を集めて捨てるといった二次的な廃棄が行われたと考えられる。続いて上層が堆積し始める時点で、土坑南側に土器片がややまとまって廃棄される。さらに、上層が堆積していく間、土器片の廃棄が続いていく。SK-153における土器廃棄の期間は、少なくとも第Ⅳ期から第Ⅴ期の２細別時期にまたがっていたようである。

SK-156も、まず下層が形成される。その後、下層形成直後から中層形成中に、半完形個体や未焼成の粘土が土坑内にまとまって流入する。しかし、上層が堆積し始めると土器はほとんど流入しなくなってしまう。SK-156における土器廃棄の期間は、第Ⅱ期で完結する相対的に短いものであったと考えられる。

以上を模式化した図が、第３図である。覆土形成の時間的な流れを縦軸で示し、土器廃棄のタイミングを横方向の矢印で示した。矢印の太さは一回に廃棄される土器量を、本数は土器流入の回数を表している[3]。SK-153への土器流入が、下層堆積後から上層堆積完了までの間、少量の破片が繰り返し廃棄されるに対し、SK-156では、多量の破片が一括して廃棄される状況を

確認することができる。

報告書に掲載された一枚の微細図では、SK-153・SK-156の両土坑は単に「多量の土器破片が出土した土坑」としてまとめられる。しかし、遺物出土状況と覆土の堆積状況を比較検討することによって、実際には土坑によって異なった覆土形成過程を経て埋没していることが確認できた。本稿では土器出土状況から想定される土器廃棄活動を中心に検討を行ったが、覆土形成過程の背景はこれ以外にも、覆土自体の（例えば土壌堆積学的な視点からの）分析や、他の遺物の分析、さらには土坑の構築から始まる遺構のライフサイクル全体の中での覆土形成の位置づけといった多くの課題が残っている。今後、他遺跡や他手法での分析事例を増やしながら、さらなる検討を行っていきたい。

本稿を作成するにあたり、御教示、御協力いただいた方々に、心より感謝致します。

註

(1)　報告書中でも上層・中層・下層の特徴についてまとめているので参照されたい。なお報文では上層から順に海老原氏の定義した第一次～第三次埋没土に対応させているが、これは下層を第一次、中層を第二次、上層を第三次埋没土に対応させるのが正しい。この場を借りて訂正し、お詫び申し上げる。

(2)　ここでいう「廃棄」とは、土坑への直接的な投げ込みに限らず、土坑周辺に放置された土器片が覆土と共に流れ込む場合のような間接的な土坑への流入まで含む広義の意味合いで使用している。

(3)　ただし、この図はあくまでも模式的に示したものであり、実際の土器量や廃棄活動の回数を表しているものではない。

引用文献　（紙面の都合上直接引用した文献に限り、参考文献は割愛した。）

海老原郁雄　1975『梨木平遺跡　第４次調査報告書』　上河内村教育委員会

進藤敏雄・合田恵美子・後藤信祐　2000『御霊前遺跡Ⅰ』　㈶栃木県文化振興事業団

塚本師也　1992『品川台遺跡』　㈶栃木県文化振興事業団

塚本師也　1998「袋状土坑における遺物出土状況と遺構間の出土土器接合－栃木県那須郡湯津上村品川台遺跡の事例より－」『シンポジウム　縄文集落研究の新地平２』発表要旨　縄文集落研究グループ

永岡正美・後藤信祐　2000「益子町御霊前遺跡」『埋蔵文化財センター年報第９号（平成11年度）』㈶栃木県文化振興事業団　埋蔵文化財センター

長島元重・田代　寛　1971「坊山遺跡緊急発掘抄録」『栃木県考古学会誌』第１集　栃木県考古学会

塙　静夫・田代　寛　1970『金井台』　芳賀町の文化財第４集　芳賀町教育委員会

塙　静夫・中村紀男・橋本澄郎　1974『添野遺跡の研究』　市貝町教育委員会